

# 高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

# Newsletter

No.039

目次

2018.6

- 平成29年度学内版GP成果報告  
川村 嘉春 教授  
多田 剛 教授
- 大学機関別認証評価に備える
- 活動報告
- お知らせ
- 編集後記



信州大学 | 高等教育研究センター  
SHINSHU UNIVERSITY

## 平成29年度学内版GP成果報告 vol.1

本号より、『平成29年度学内版GP』に採択された取り組みをご紹介します。

平成29年度は、「受講生の主体的学修を促す工夫」、「受講生の満足度（＝自己効力感、等）を上げる工夫」に該当する教育取組を応募対象とし、11件が採択されました。

その中から、いくつかの取り組みを、今年度のニュースレター（年4回発行予定）でご紹介いたします。

★ニュースレターのバックナンバーは、高等教育研究センターのホームページにてご覧いただけます。

<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/approach/publication/cat2840/>

### 学術研究院理学系 川村 嘉春 教授 「学生主体の学修共同グループの構築」

#### 取組の背景

平成27年度に理学部が改組され、6学科から2学科（数学科、理学科）への再編、「より深く学びたい!」「より広く学びたい!」という学生の要望にこたえるための3つのプログラム（標準プログラム、先進プログラム、学際プログラム）の開設、共通科目として「微分積分学Ⅰ,Ⅱ」、「線形代数学Ⅰ,Ⅱ」、「グリーンサイエンス通論Ⅰ,Ⅱ」の必修化、が実施されました。これらの改編に伴い、学科・コース・プログラム・学年を超えた学生間の交流が盛んになる反面、高等学校における数学と理科の履修状況にばらつきがあり、理数科目の修得に苦慮する学生が現れることが予想されました。そのような学生に支援の手を差し伸べることが責務であると考え、本取組を実施しました。

#### 取組の概要

学生が学生を教えることにより成長する仕組みを誘導するための学生主体の学修共同グループの構築を目指しました。ここで、学修共同グループとは3つの活動（「学生学修ルーム」の提供、「サイエンスラウンジ」の運用、「自主ゼミ」の奨励）のもとで培われる学生主体の能動的な集合体のことです。



#### 活動の内容

1. 学生学修ルームとは学生同士の学修上の交流を促すスペースのことです。理学部内では、例えばA棟リフレッシュラウンジにおいてテーブル・椅子を自由に配置し、ホワイトボードを利用して、好みのスタイルにあわせた学修空間を作り出しています。
2. サイエンスラウンジとは学部4年生や大学院生がアドバイザーとなり、本学を学びの場とする方（理学部の学生に限らず他学部学生や市民開放講座の受講生も含まれます）の学習指導・相談・質問に応じる場です。
3. 自主ゼミでは学生が自ら参加者を集め自主的に学習したい分野とテキストを選んで輪講形式のゼミを行います。



サイエンスラウンジの入口  
（通常は引き戸が開いていて開放的です。）



## 今回の成果

「サイエンスラウンジ」における学習相談者は1年間で延べ325名にのぼり、相談内容は物理学、化学、数学、・・・、進路相談など多岐にわたりました。そのデータは教員に共有され、教育指導や授業に活用されています。「自主ゼミ」の参加者は延べ84名でした。

## 今後の計画

本取組は、基礎研究と同じで継続してこそ意味があり真価が発揮されます。サイエンスラウンジは2007年の秋に始まり、学内版GP、文部科学省「理数学生プロジェクト」、学部長裁量経費などの支援のもとで現在まで継続的に実施されています。今後、その機能強化を目指します。具体的には、自主ゼミとの連携をさらに図り、「自主的に学んだ内容・話題に関する解説・発表の場」も兼ねて進化させる計画を練っています。



サイエンスラウンジの風景  
(後方にも2枚のホワイトボードがあります。)

## 学術研究院医学系 多田 剛 教授 「教員と学生が一緒に振り返る臨床実習のまとめ」

### はじめに

医学教育の国際標準化で臨床実習の強化が求められ、現在の医学生は知識のみならず、態度と技能をこれまで以上に習熟する必要があります。信大医学部では早期から病院での実習期間を2年に延長すると共に、県内外36病院の協力を得て、全国で初めて学生一人ひとりが個別の診療チームに参加する実習を実現し、彼らの診療能力の向上に努めてきた。

しかし、現在の大学教員や医師らはグループ単位で診療を見学して育った世代であり、彼らの学生指導には未だ改善の余地がある。また、どれほど素晴らしい実習を企画しても適切に評価しなければ、学生には何も残らない。そこで、医学科では各病院、各診療科での実習がさらに充実するように、学内に加えて地域病院にも出張して医学教育FDを開催するとともに、学生が教員とともに実習を振り返る場を設けた。

### 臨床実習の新しい評価法

臨床実習にはポートフォリオでの評価が最適である(図1参照)。学生には実習中に集めた資料を積み重ね、何度も見返すことによって自分自身の教科書を作ることを勧めている。しかし、現状では教員がそれらすべてに目を通すことは難しい。代わりに私達は学生に基準表(ループリック)に沿ってレポート(ショーケースポートフォリオ)を作成して提出してもらっている。

これは2部構成で、1つは実習中に自らが学んだ医学知識について書く「学習レポート」で、もう1つは自らがチームの一員として活動した中で感じたことを書く「行動レポート」である。教員はこれらを事前読み、実習最終日に学生と一緒に病院での実習を振り返り、その振り返り状況と提出物、指導医が封印した実習評価票の三者から彼らの実習を5段階に評価している。



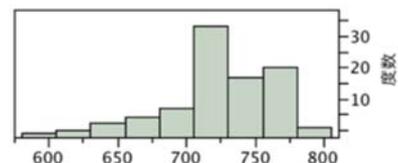
図1 ミラーの能力ピラミッドとその評価



### この取り組みによる成果

上記2レポートを読むと実習中の学生の様子が手に取るようにわかる。その上で一緒に振り返ることで、教員は学生をより形式的に評価できるようになった。また、これまでは臨床実習の評価に出席日数以外の要素を組み入れることは難しかったが、病院からの評価を封印したことや、レポートの評価に基準表を用いたことで、総合的評価が以前よりも正確になった。1コースの評価をS:90, A:80, B:70, C:60, F:30と素点化して810点満点にすると、学生の得点分布は図2のようになり、臨床実習をGPA制度に組込む目処が立った。

図2



### 今後の展望

その他の実習にも上記のような評価を取り入れれば、現在行われている医学科の授業の大半をGPA制度の対象とすることができる。今後はこの実現に取り組みたい。



## 大学機関別認証評価に備える

国公立の大学は、7年以内に一度、国の認証を受けた評価機関による第三者評価を受けなければなりません。本学は平成32年度、大学改革支援・学位授与機構による認証評価を予定しています。ここでは、同機構の「大学評価基準（案）」（平成30年度中に改訂予定）の「領域6 教育課程と学習成果に関する基準」に準拠して、教学方面で認証評価に関して注意しておきたいところを解説していききたいと思います。



### 評価の対象組織

評価の対象は大学全体ではありません。領域6の「判断の指針」で、「この領域の各基準については、各教育課程の状況を踏まえて、学部・研究科等ごとに確認し判断します」と明確に述べています。領域6では、学位授与の方針（以下、DP）と教育課程編成・実施の方針（以下、CP）を判断の基準としています。そのDPとCPは、大学全体を単位とするのではなく、カリキュラムを制定の単位としています。そのため認証評価はカリキュラム＝部局を単位とするということになります。したがって、認証評価対応も、基本的にはそれぞれの部局で準備をすることになります。

### 認証評価の考え方と認証評価対応

認証評価では、第三者評価を一過性のイベント的に捉えることはありません。「内部質保証システムが機能しているか」の検証が認証評価全体の焦点です。それは、「認証評価の点検項目を、各部局が普段から組織的に点検しているかどうかを見る」と言い換えられます。ですから、受審する平成32年度に何をしているだけでなく、それより以前の年度から何をやってきているかを、エビデンスとともに見せなければならないということになります。

### 何を用意するか

領域6では、次の項目が焦点となるでしょう。

#### 基準6-3 教育課程の編成及び授業科目の内容が、学位授与方針及び教育課程方針に則して、体系的であり相応しい水準であること（下線は加藤）

ここでは、カリキュラムがDPでうたっている教育成果に向かうよう編成され実施されているかを見ますが、特に、下線を施した「体系」性と「水準」に注目したいと思います。DPを達成するためにCPが制定されていますが、そのCPにしたがって、各授業が体系的に配置されているか、各授業の教育目標の水準が保たれているかが点検対象となります。

認証評価では、評価員が個々の授業の体系性と水準を直接点検するという事は、第一義的にはありません。そうではなく、個々の授業が所属する教育単位＝部局の中で、普段から体系性と水準をどのように点検しているのかを点検します。具体的には、部局または学科等の中で、どのようにシラバス点検が行われているかを見るということになります。したがって、認証評価に備えるためには、各部局で、(1)シラバス点検の体制、(2)シラバス点検の観点についての合意に至ったプロセスとその浸透のための取組、(3)シラバス点検の実績を示す数値と、点検から改善に至った典型例、(4)シラバス点検の結果得られたこと等を報告できる形にしておくことが必要となります。この30年度の冬までに「シラバス点検ガイドライン」を教務委員会で用意することになりますから、(2)と(3)につきましては、部局ごとではなく、全学的に対

処することになりましょう。ただその場合でも、シラバス点検の意味と点検ガイドラインの浸透は部局で対応していくことになります。

なお、上記でカッコに入っている(4)は、認証評価では問われることはないと考えております。しかし、シラバス点検は組織的取組であるため、その成果を明らかにしておくことは、組織構成員の努力に報いるために当然求められるものでありましょう。そういう観点であげておきました。(4)は具体的にはカリキュラム全体のGPAと、授業アンケートの「目標への到達度」、「達成感」の数値の向上が考えられますが、これについての詳細は別の機会に譲りたいと思います。ここでは、「組織としての教育力」がいずれは問われることになり、その際にそれらの数値を使うことになるだろうという予測に留めておきたいと思います。

### 授業間の調整

基準6-3は、具体的には各授業の体系性と水準を点検することになると前節で述べました。これは「授業間の調整」を行うという作業になります。一部の学部では、すでにこの授業間調整が組織的に実施されています。しかし、多くの部局にとっては未体験ゾーンに突入するということになりましょう。体系性については、本学でもカリキュラム・マップをすでに作っていることで問題ないでしょう。しかし、水準の方はどうでしょうか。一時「授業のナンバリング」が本学でも議論されましたが、ナンバリングで本当にしなければならなかったのは、それぞれの授業目標をどこに置くかについて組織的に考えるということだったと考えます。

水準については、具体的には、極端に成績がよい授業や、反対に極端に成績が悪い授業を組織内で点検していくという作業になります。そこでは、成績分布だけでなく、授業アンケートの「授業目標への到達度」・「達成感」の二項目の数値を見ながら点検していくことになります。数年前に「学生による授業アンケート」で全学共通の項目を設定することを教務委員会で決めましたが、共通項目を導入したことで、授業アンケートを水準調整にも使うことができるようになりました。

### 教員による授業アンケート

基準6-3は、部局が自ら定めたCPにしたがって教育を点検していく、というようにも言い換えられます。CPに照らした点検は、上記のシラバス点検と並んで、教員が自分の授業をふりかえり改善を考える、という個人レベルでのPDCAサイクルがあることを見せることも重要です。「教員による授業アンケート」は、それに使える強力な評価対応ツールとして機能するものとして作られています。しかし現状ではそういう認識が浸透しているとは言えません。こちらの方も浸透を進めていきたいと思えます。

（高等教育研究センター 加藤 鉦三）



活動報告

部局と高等教育研究センターとの懇談会を実施しました。

高等教育研究センターでは、教学関係の中期目標・中期計画の進捗状況の把握や計画遂行に向けた意見交換を主な目的として、各部局との懇談会を開催しています。今年度も右記のとおり5月中旬～6月下旬にかけて各部局を訪問しました。各部局長や教務、中期計画、評価等をご担当の先生方にご参加いただき、主に以下のテーマについて意見交換を行いました。

- \*中期目標と認証評価について
- \*学生および教員による授業アンケートについて
- \*大学生基礎力ゼミについて
- \*FDについて
- \*各種調査のフィードバックについて

平成30年度第1回懇談会実施日程

5月18日 (金)	理学部
5月23日 (水)	全学教育機構
5月30日 (水)	教育学部
6月 8日 (金)	繊維学部
6月11日 (月)	医学部
6月12日 (火)	経法学部
6月19日 (火)	工学部
6月25日 (月)	農学部
6月27日 (水)	人文学部

今年度も昨年に引き続き、懇談会形式の開催は今回の1回のみとし、今後は各事項についてご担当の先生方と直接連絡をとっていくこととしました。

★★ご参加いただきました皆様、ありがとうございました★★



お知らせ 平成30年度FDカンファレンスを開催いたします。

平成30年度FDカンファレンスを開催いたします！  
 今年度は、ICTを活用した主体的学修の促進をサブテーマの1つとし、講師に千歳科学技術大学の小松川浩先生をお迎えします。  
 ICT関連以外にも、授業デザインや調査の分析結果からみる学生の実像などについて、アクティブラーニング形式で行います。平野センター長によるFDもあります。  
 どなたでもご参加いただけますので、ご興味のある方は、ぜひともご参加ください。



日 時：8月21日 (火) 10:30開会～22日 (水) 11:50開会 (1泊2日)  
 場 所：ビレッジ安曇野 (<http://villageadumino.freebook.jp/>)

テ マ：学生が参加したくなる授業の作り方

平成29年度FDカンファレンスの様子

- 全体プログラム：ようこそ&アイスブレイキング
- 研修の目的を設定する
- CBTを活用した反転学習の取組-教材設計とデザイン-(仮)
- まとめとアンケート
- プログラムA：ICTの活用
- プログラムB：学生を知る



★ご参加には申込みが必要です。ご所属の部局学務担当へご連絡ください。

編集後記

「大学生基礎力ゼミ」も6年目に入り、全学教育機構・各学部・各センターの先生方で総勢14名になりました。ライティング指導には優秀な学生たちが携わってくれ、個性豊かな先生方と学生たち、図書館や学生相談センターの熱意あるスタッフと、目標を共有してチームで働ける喜びを感じています。

(高等教育研究センター 加藤 善子)